

異文化に対する Awareness を育てる

—Social Rules of Speaking の視点に立った英語の授業—

伊 藤 晶 子

1. はじめに

英語教育の第一目標は、コミュニケーション能力の育成にあると言われている。筆者は、新学期ごとに英語の授業に何を期待するかというアンケート調査を行っているが、その結果は学生のオーラル・コミュニケーション志向を裏付けるものになっている。具体例をあげれば「海外旅行の際に英語で話せるようにしたい」「外国人と友達になれるよう英会話を学びたい」などが上位を占め（伊藤1996）、この傾向は年々顕著になってきている。この調査結果からも、实际的コミュニケーション能力の養成が学生のニーズに応えることになる、ということがわかる。

本稿では、コミュニケーション能力とは何かを考察したうえで、その育成に欠くことのできない異文化理解を、特に話し方の社会的ルールという視点でとらえ、英語の授業で実践する。そしてこの実践方法を学生から得た授業評価をもとに検討する。

なお、ここでは異文化とは英語圏の国々（アメリカ、カナダ、イギリス、オーストラリア等）が持つ文化とする。とりわけ、参考にした先行研究やこれまでの筆者の経験からアメリカ社会の文化を例として取り上げることが多くなった。また、それぞれの英語をイギリス英語、アメリカ英語のように区別する表現もあるが、その違いは根本的なものではなく、これから述べる「適切さ」に対する発想の基本点においては相違がない（鶴田他1988）ということをつけ加えておく。

2. 理論的背景

2.1 コミュニケーション能力とは何か

Canal and Swain (1980) は、理論的枠組みとしてコミュニケーション

ン能力 (Communicative Competence) を次の四つの構成要素に分類している。

- (1) 文法的能力 (Grammatical Competence)
- (2) 社会言語的能力 (Sociolinguistic Competence)
- (3) 談話的能力 (Discourse Competence)
- (4) 方略的能力 (Strategic Competence)

文法的能力は音声、語彙、文型・文法事項に関する能力であり、社会言語的能力は特定の文脈に適切な発話をするのできる能力、談話的能力はパラグラフまたはそれ以上の単位の文章の構成や展開に関わる能力、方略的能力はコミュニケーションをよりスムーズにする言い換えなどの能力をさす。構成要素のひとつである文法的能力はコミュニケーションにとって欠くことのできないものではあるが、それだけでは十分ではない。コミュニケーションを円滑にはかるレベルに到達するには、すべての要素が必要とされる。

この理論的枠組みを提示した目的を Canal (1983) は「学習者が実際のコミュニケーションの場で限られたコミュニケーション能力を最大限に活用できるように準備し、励ますことである」としている。そのためにはどのような授業展開が可能であろうか。Wolfson (1989) によれば「その外国語が話されている言語共同体でうまく意味交渉ができるかどうかは、コミュニケーション能力にかかっており、中でも社会言語的ルールは重要な一面である」としている。また、この社会言語的能力は国際理解の基礎となるものであり、異文化間コミュニケーションにおいて極めて重要なものになっている (小池1994)。

2.2 社会言語学からのアプローチ

英語でコミュニケーションをはかる時に犯す誤りは二通りある。ひとつは音声、語彙の選択を含めた文法的な誤りである。しかし、この誤りは非母語話者であるがゆえに犯す初歩的なものと理解され、大事に至ることは少ない。もうひとつはその状況、場面に不適切なことを言うてしまう誤りである。この場合は「無作法」であるとか「礼儀知らず」といった個人的な資質に還元されがちである。特に流暢に英語を話す人がこの誤りを犯すと、この傾向はいっそう強くなる。したがって円滑なコミュ

ニケーションには特定のコンテキスト(発話の前後の文脈, 状況, 場面, 人間関係, 及びそれを取りまく社会的, 文化的背景をも含む)において「適切な」発話をする能力が非常に重要になってくる。この「適切な」発話は社会的, 文化的要因に大きく影響され, 目には見えないルールがあると言われている。ここで注意しなければならないのは, 社会言語的な文法ともいえるこのルールは, 普通の文法と違って普遍的なものではない。同じ場面でもくだけた話し方を好む人もいれば, あたたまった言い方を好む人もいる。話し方というのは最終的に個人の人格や個性に影響されるものである。話し方の社会的ルールとは, それらを押しつぶすことなく, 特定のコンテキストにおいて不本意な誤解を招くことのないように, 後に詳述するが, ガイドラインの役割を果たすものと言えよう。

2.3 発話行為

発話行為 (Speech Act) とは言語が持つ機能のことで, 具体的にいえば, 拒否, 謝罪, 讃辞, 依頼などをさす。これらの行為を行う場合, 適切な表現を使うということは, その社会における話し方のルールに従うことである。Cohen (1996) は, 発話行為の理論と実践を理解することで教師は学習者に, 目標言語でより文脈的に適切な発話をさせることができると述べている。

しかしながら, 私たちが母語を話す時のことを考えてもわかるようにその場に適切な話し方をするのは無意識に行う行為である。幸いなことに, 英語がそれぞれの発話行為を行う際に, どのようなルールに従っているのかという研究が盛んになり, 文献も利用できるようになってきている。ここでは先行研究に基づき, いろいろな発話行為における話し方の社会的ルールを授業実践のガイドラインとした。

2.4 話し方の社会的ルールを意識化させるために

以上述べてきた話し方のルールは, その文化の中で成長していく過程で経験として自然に身につくものだと言われる。しかしながら, 日本のように EFL (外国語としての英語教育) の状況ではどうしても, インプット量が限られるために, 授業を有効に使う必要があり, それが果たす役割は大きい。

最近の英語の教科書は異文化を扱ったものが多い。形式化された顕在文化（クリスマス、バレンタイン、ハロウィンなどの行事や食事のマナー）、形式化されていない潜在文化（英語圏の人々のものの考え方、日本人のものの考え方、具体的な誤解の例）など様々である。しかしながら、発話の機能を社会的ルールの観点からとらえた教材は少ないうえにほとんどが読解中心である。学習者は読むことにより文化的情報を得て知的な理解には有効であろうと思われるのだが、知識があるということと、実際のコミュニケーションでその知識に基づいて行動することはイコールではない。学習者に話し方の社会的ルールの存在を意識させ、実践させるには、どうしたらよいだろうか。

Olshtain & Cohen (1991) や Beebe (1994) は社会的ルールを教えることの重要性を主張すると同時に、その指導法をいくつか提案している。たとえば、1) バラエティに富んだモデル・ダイアログを与える、2) 謝罪、拒否などの発話行為に役立つ表現を教える、3) 特定のコンテキストでの応答を自由に考えさせたりマルチプル・チョイスで選択させる、4) ロールプレイ、5) ビデオ、映画の活用——などである。

ここでは発話行為のデータを収集したり、学習者の意識がどのレベルにあるか診断するために行う Discourse Completion Task を作成し教材として使用する。これは、先述した発話行為のいろいろな場面、特に異文化摩擦がoccurするような状況を設定し、学習者自身が判断を下すものである。自由に応答を考えたり選択肢の中から選ぶという作業を通して、疑似的にはあるがその状況に参加できるので、経験として理解することができる。自分が参加して得たものは、記憶に残り長く保たれることで、より実践に結びつきやすくなるのではないだろうか。

3. タスクの実施

3.1 対象者

話し方の社会的ルールに焦点をあてたタスクは、1997年4月から10月まで、次の大学において一般教養の英語として週一回90分で行われている授業の中で不定期に実施された。対象者は、相模女子大学文学部国文科2年39名、相模女子大学短期大学部国文科1年75名、家政科1年39名、神奈川大学工学部1年51名、法学部・外国語学部2－4年53名の合計257

名である。なおこれらの英語の授業は通年であるために、終了時（1998年1月）までタスクは継続して行う予定である。

3.2 実施手順

- (1) Discourse Completion Task を与える
- (2) 個人で適切な応答を考える
- (3) グループおよびペアでディスカッション
- (4) リーダーが黒板に応答を板書
- (5) 全員で文法をチェック
- (6) 文献等をもとにガイドラインを示唆
- (7) ダイアログを口頭練習

3.3 タスク内容

実施したタスク（一部）の内容と、学生が適切と考えた応答例で代表的なもの、及び示したガイドラインは次のとおりである。

学生の応答にはシステマティックな誤り（文法、語彙の選択、語用の移転）が見受けられるが、それらの分析と原因についての考察は本稿の目的ではないのでここでは避けることにする。

(1) ADDRESSING

- 1) You meet an American student for the first time.

You: Hello. I'm (your name).

Your friend: My name is John Smith. Nice to meet you.

You: Nice to meet you, too, _____.

- 2) You meet an American English teacher for the first time.

You: Hello. I'm (your name).

Your teacher: My name is John Smith. Nice to meet you.

You: Nice to meet you, too, _____.

学生の応答

1)に関してはほとんどの学生が John と応答, 2)でも Mr. Smith が大多数であったが, 目上の人なので名前を呼ぶのは失礼なのではないか, どのように呼んで欲しいのか指示されるまで呼びかけないという意見や, 日本語の「先生」の意の teacher をあげた者がいた。

ガイドライン

個人差, 地方差があるとしつつも, 高橋 (1993) は英語には呼び名についてある種のシステム (address system) があり, そのフローチャートをたどると「職業タイトル+ラストネーム」「Mr.+ラストネーム」「ファーストネーム」などのアウトプットに到達する。それによれば, 1)の場合は, ファーストネームが普通であり, 2)の場合は地位を示す特殊タイトルや称号, たとえば教授, 博士 (Professor, Doctor) がないのであれば「Mr.+ラストネーム」が適切である。「Teacher」はアメリカでは小さな子供達だけが呼びかけに使用することがあることを付け加えた。

また, アメリカ社会ではファーストネームを好む傾向があり, Please call me John. とファーストネームで呼ぶことを提案されたら, それに従うのが普通である。

(2) COMPLIMENTS

Your friend is wearing a brand-new sweater. Praise him/her.

You: _____

Your friend: Thank you.

学生の応答

Nice が一番多く見られたが, 他にいろいろな形容詞 (cool, great, beautiful, pretty, wonderful, good) を使って sweater を表現した。感嘆文を使って称賛の気持ちを強く表した例, 形容詞+sweater, 形容詞だけの例も見られた。

ガイドライン

Wolfson (1989) によれば讃辞には基本的な三つのパターンがあり、(1. Your sweater is/looks nice. 2. I like/love your sweater. 3. That's a nice sweater.) これらが大半(約85%)を占める。形容詞も nice, good, beautiful, pretty, great の五つが多用される。

文法構造は非常にシンプルではあるが、相手をほめることはアメリカ社会では重要で、挨拶がわりとして、連帯感を強めたり好感をいだかせる機能がある。習慣化していないと言にくいかもしれないが、よいと思ったら素直に表現することが大切である。

(3) RESPONSE TO COMPLIMENTS

You got good marks on an English exam.

Your teacher: Your English has improved very much.

You: _____

学生の応答

Thank you.が単独で使われるよりも、後に一言付け加えるケースが多く見受けられた。例えば、I study English every day. I'm glad I studied hard. I made an effort a little bit.などである。讃辞をそのまま受け取らず、否定し No. I haven't studied so much. I should study harder. と答える学生も相当数いた。

ガイドライン

アメリカ社会では讃辞が日常のいたるところで聞かれる。ほめられた側は Thank you. と応答するのが普通であり、謙遜して讃辞を否定し続けるとほめた側は不快に感じる。大多数のアメリカ人は讃辞を拒否されたり否定されることに慣れていない (Baxter & McNulty 1987)。

(4) REFUSAL

Your boss is giving a party at his house next Sunday, but you have a date on Sunday. How would you turn down his invitation? Your

boss is much older than you and the relationship is quite formal.

Your boss: I'm giving a party for the staff at my house on Sunday. Can you come?

You: _____

Your boss: Oh, that's too bad. Maybe next time.

学生の応答

No, I can't. I'm sorry. や I'm sorry. の後でいけない理由を述べたものが多かった。プライベートなことなので本当の理由は言わないとする学生が多く、単に約束があるとだけ言うパターンが目立った。中には病院に見舞いに行く、両親が訪ねてくるなどの理由を作り上げる者もいた。I'm sorry. を二回（最初と最後）言う例もかなりあった。

ガイドライン

ほとんどすべての学生が I'm sorry. という謝罪から始めているが、英語では Oh, that sounds like so much fun. I'd love to come. などの好意的な表現から始め、それから But, で謝罪、具体的な言い訳につながる。一般的な言い訳はあいまいに聞こえ、本当は来たくないのではと思われる危険性がある。

I'm sorry. を繰り返すことで誠意を表そうとしているが、日本語の「すみません」とはイコールではない。もっと責任を伴う謝罪表現であることを認識しなければならない。

(5) APOLOGIES

You are in a hurry and knock down an old lady in the street. What would you say to her?

You: _____

学生の応答

I'm sorry. Are you OK? のパターンが一般的であった。I'm sorry. だ

けの応答も多く見られた。

ガイドライン

Cohen & Olshtain (1981) の研究によれば、英語の謝罪には意味上の公式 (semantic formula) がみられる。それは次の五つからなる。1) 謝罪の表現, 2) 言い訳や理由, 3) 責任を認める, 4) 実害を与えていればそれを償い, 5) 以後気を付けることを約束する。従っていくら誠意を込めて I'm sorry. を連発してもそれだけでは謝罪の気持ちが伝わらないことがあるので注意しなければならない。

(6) REQUESTS

You ask your friend to get a bunch of flowers for your mother's birthday. Your friend is about to go out. Your friend has no obligation to carry out your request.

You: _____

Your friend: Yes....

You: Well, it's my mothers' birthday, and I want to give her some flowers.

Your friend: Yes, sure, no problem.

You: Oh, thanks very much.

学生の応答

依頼をすることはわかっているのだが、空欄が二箇所ある点で混乱した学生が大半であった。はじめの空欄に Could you, Would you? (あるいはそれに please を加えたもの) という形で依頼をして、次は空欄のままにしておいた。全体で二組のグループが、はじめに Will you do me a favor? を記入した。

ガイドライン

英語で相手にとってする義務のないことを依頼する場合、いきなり頼

むではなく、まず相手についてがあるかどうかなどの予備質問から始める。たとえば、You aren't going past the flower shop, are you? などである。これは強制力のない依頼であることを表すためであり、この予備質問のおかげでもしも断られても表向きは相手の予定を聞いているだけなのでその場の雰囲気をおこすことはない。次に具体的な依頼を行う。強い表現 (Can you....?) から弱い表現 (I was wondering if you could possibly....) まで様々であるが、学生が好む Would you....? は相手の通常の仕事を指示する時に使う表現であり、依頼の表現としては使われない。Please も同様である。これは指示の口調をやわらげるもので依頼には使わない(鶴田他1988)。英語圏は相手の自由を侵害することに関して慎重な文化であるがゆえに、もしこの段階を踏むやり方を無視すれば、強引だとか不作法だという評価を受ける可能性がでてくる。

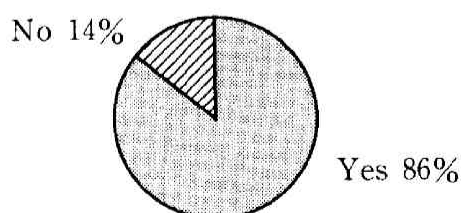
また、お願いがあるのですが (Will you do me a favor?) も予備質問の機能を持つ。通常は Sure. Sure, if I can. などと応答されるので、次いで具体的な依頼をする。

4. 学生からのフィードバック

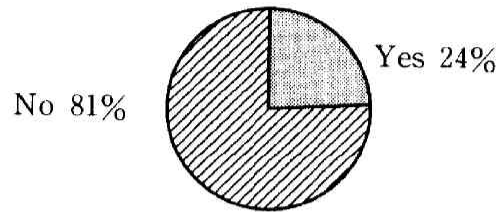
4.1 アンケートの実施とその結果

実施から約六ヵ月経過した時点で、これらの授業に対するフィードバックを記名によるアンケート(付録)で行った。具体的には、先に述べた(5) APOLOGIES のタスク終了後であった。Yes/No 評価, 五段階評価の結果に関しては百分率で表示し、自由に記入する項目に関しては特に多かったものをまとめて示す。

- (1) 話し方のルールに注目した英語圏の国々と日本の文化の違いに興味がありますか。



(2) 今までに話し方の社会的ルールについて学んだことがありますか。



(3) 今日のミニ・セッションでは何を学びましたか。

1) 具体的な謝罪のルールについて

- ・日本語の場合、すみませんと言えば自分の非を認めたということでさらに言い訳を加えることは言い訳がましく、その場の雰囲気が悪くしかねない。英語の謝罪と随分違うと思った。
- ・誠心誠意謝れば気持ちは通じると思う。言葉よりも気持ちが大切。
- ・このようなルールがあるなんて知らなかった。これを知らないと自分の気持ちが相手に十分伝わらないのは怖いことだ。

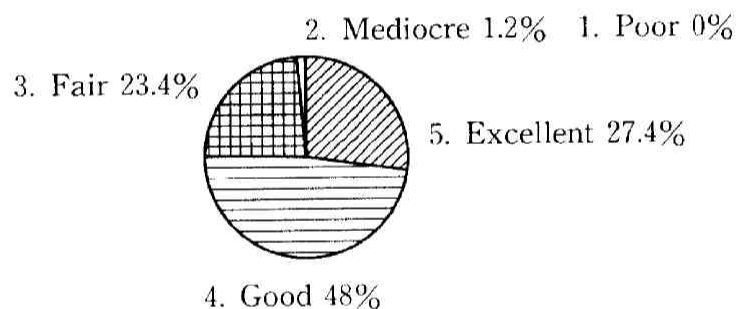
2) 今回を含めこれまでのセッション全般について

- ・場合に応じて用いるべき言葉と使うルールがあるということ。
- ・文法的に正しいということが必ずしもその場面に適切ではないということ。
- ・ルールを間違えると相手に不快感を与えてしまう可能性があるということ。
- ・コミュニケーションには文法以外に学ばなければいけないものがあるということ。
- ・英語では単刀直入で強引なくらいの言い方が好まれていると思っていたのだが、実際はもっと奥深いものだということがわかった。
- ・日本語をそのまま英訳するだけではダメだということ。

(4) このセッションで気に入った点はなんですか。

- ・グループ、ペアでの学習。コミュニケーションを図れた。
- ・グループリーダーの板書でいろんな応答があるものと思った。
- ・実用的だということ。細かい文法より役立つ。
- ・具体的なダイアログをつかっている点。わかりやすい。
- ・状況を設定してあるのでとっさの一言としてでてきそうです。

- (5) 気に入らなかった点などコメントがあったら書いてください。
- ・ルールを学ぶよりも英語力をつける方が先決問題だと思う。
 - ・このようなルールの違いは学ばなければわからないのでこれからも授業でとりあげてください。
 - ・こういう切り口の授業を受けたことがなかったのできちんと学んでみたいと思います。
 - ・郷に入れば郷に従えということでしょうか。
 - ・どうして相手の文化のルールに合わせなければいけないのか。
 - ・このようなルールを習うと便利かもしれないが、実際に使ってみると外国人に普通はそんな言い方をしないとされたりするから、あまり信用できない。
 - ・もっといろいろな状況でいろいろなルールを知りたい。
- (6) 授業全体の評価（五段階評価）はどうですか。



4.2 学生の反応

まず、数値的には明らかに、話し方のルールを含めて英語圏の文化に興味を持っていることがわかる。同様に今までの英語教育で学んだことがないとする学生が非常に多かった。このことから、英語教育においてこの分野はスポットライトのあたらなかった分野であり、学生のニーズに応えるという点において、これからも実践していく必要性を感じた。それは上記の授業評価で、中間の Fair を含めると98.8%の学生が好意的に受け止めていることから判断することができる。

自由に記入する項目では、量的にポジティブなコメントが圧倒的であった。「文法理解だけではうまくコミュニケーションすることができない。言語の裏にある文化的、社会的要因の重要性に気がついた」、「ルールを

侵すことで自分の意図とは逆に相手に不快感を与えてしまう可能性があるということがわかった」という内容が最も多く、将来的に学んでいきたいとするコメントからは学生の意欲が感じられた。

しかしながら、少数ではあったがネガティブなコメントもあった。次の考察ではこれらを中心に、今後授業を展開していく上で考慮すべき点を考えてみたい。

5. 考 察

今回扱った英語を母国語として話す人達の文化圏の中でも、その文化的背景は多種多様であり、個人レベルでみれば個性も多種多様である。またお互いの力関係も微妙にルールに影響すると考えられる。したがって先述したように「授業内で示したルールこそが、その状況で唯一絶対である」と指導するのは危険である。ここで大切なのは、示されたルールをガイドラインとして、不本意な誤解を生み出さないように努力することであり、実際にコミュニケーションをはかる時にはその状況に適切なルールの存在を敏感に感じ取ることである。そうやって個人レベルのコミュニケーションを繰り返すことにより、学習者はルールを経験として理解することができるのではないか。

文化の多様性を認めることが社会言語学の第一歩である。それぞれの文化に優劣はない。それなのに英語圏の人々とコミュニケーションする場合、なぜかれらの文化的、社会的ルールにあわせなければならないのか、日本のルールも尊重すべきだ、とする意見がある。これに関しては、使用言語とそれを取り巻く環境を考慮することが大切だと思う。つまり、使用言語そのものが英語圏の文化を背景に持っているということ、英語圏の国々でコミュニケーションをはかるならば、環境自体が英語文化圏であるということだ。したがって英語の文化にあわせるのが普通であろう。

しかし将来的には、実際のコミュニケーションの場で異文化を容認し、相手の言葉の裏側にある意味を理解しつつ、自分の意図するところを相手にも理解してもらおうという異文化間におけるコミュニケーション「調整」能力を育てていくのが理想だと思われる。なぜなら英語には世界の公用語としての側面がある。いわゆる英語圏ではない文化を背景に持つ

た人々が英語でコミュニケーションをはかる場合も多い。最終目的はコミュニケーション「調整」能力の育成だとしたら、そこに至るまで何をガイドラインにすればよいのか、どのような方法論が可能なのかを、これからの課題として考えていかなければならない。

タスクを作成する際に言語行為に基づいて場面を設定したが、これらも細かな状況設定や、相手との人間関係によって多様な展開が予測される。また視点を変えることで、これ以外の設定をすることも可能である。たとえば英語圏の人々のものの考え方、発想法に基づくもので、具体例をあげれば—— 1)日本人は過去志向であるのに対して、アメリカ人は未来志向であるといわれる。日本人が盛大にもてなしてしばらくして再会した時「先日は大変ごちそうさまでした」のようなお礼を期待していると、言っではもらえずに不愉快に感じるかもしれない。2)英語圏では相手に決定権を与えるのが丁寧だとされる。したがって相手の好みを聞かずに、以心伝心とばかりに心配りをして結果的には無礼な印象を与えてしまうことがある。3)文化的タブーの観点からトピックの選択に関する場面の設定ができる。4)非言語的な文化の違い、たとえば挨拶、姿勢、指、アイコンタクトなどの非言語コミュニケーションに注目する——などがあげられる。いろいろな視点からバラエティに富んだタスクを準備すれば、より内容の充実した異文化理解の授業になるのではないか。

話し方の社会的ルールを含め異文化理解学習は、文法的能力がそなわってからではないと効果がないとするコメントがあった。確かにタスクを完成させるのに適切な語彙がでてこない、文法がわからないで自信を喪失してしまった学生も見受けられた。気持ちは理解できるがタスクは文法の試験ではない。与えられた状況を疑似体験しながら、その時点におけるコミュニケーション能力を最大限に活用してみることが大切なのである。したがって、英語学習の初期の段階から導入することが可能であり、総合的なコミュニケーション能力を考えれば、むしろ望ましいのではないかと思われる。

6. おわりに

学生には、話し方の社会的ルールを視点に入れた英語教育を通して異

文化に対する容認度を高め、ガイドラインとして理解した事柄をこれから遭遇するいろいろな場面で生かしながら、異文化を持つ人々とコミュニケーションを深めていって欲しいと思う。と同時に教師も常にアンテナをはりめぐらし、異文化に対する鋭敏な感受性を養うことを怠ってはならない。よりよい実践方法を模索しながら今後とも努力していきたいと思う。

* 本稿は第36回 JACET 全国大会（1997年9月）において「文化の多様性に対する awareness を育てる授業——Teaching English to Enhance Awareness of Multiculture」と題して和田千波留氏と口頭発表したものに基づいて執筆したものである。ただし、実践方法等は大幅に変更している。

参考文献

- Baxter, J., Levine, D.R., and McNulty, P. 1987. *Culture Puzzle*. Prentice Hall.
- Beebe, L., and Fanselow, J.F. 1987. *English in the Cross-Cultural Era*. SIMUL PRESS.
- Beebe, L. 1988. "Five sociolinguistic approaches to second language acquisition". In L. Beebe (Ed.) *Issues in Second Language Acquisition*. Newbury House.
- Beebe, L., Takahashi, T., and Uliss-Weltz, R. 1990. "Pragmatic transfer in ESL refusals". In R. Scarcella, E. Anderson, and S. Krashen (Eds.) *Developing communicative competence in a second language*. Newbury House.
- Beebe, L. 1994. *SOCIAL RULES OF SPEAKING: BASICS - NOT FROSTING ON THE CAKE*. JALT '94 (in Matsuyama) Handout.
- Cohen, A.D. 1996. "Speech Acts". In S.L. McKay and N.H. Hornberger (Eds.) *Sociolinguistics and Language Teaching*. Cambridge University Press.
- Hatch, E. 1992. *Discourse and Language Education*. Cambridge University Press.
- 伊藤克敏, 1990. 「日米伝達方略の比較とコミュニケーション能力の養成」『神奈川大学言語研究』No.13.
- 伊藤晶子, 1996. 「コミュニケーションな英語教授法の試み——学生のニーズに依って——」『相模女子大学人文系紀要』Vol.60A.
- 北尾謙治, 1993. 「英語社会の言語コミュニケーション」橋本満弘・石井敏編『英語コミュニケーションの理論と実際』桐原書店.

- 小池生夫, 1994. 「異文化理解を視点に入れた外国語教育」『異文化間教育』No.8. アカデミア出版会.
- 小池生夫監修, 1994. 『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店.
- Olshtain, E., & Cohen, A.D. 1991. "Teaching speech act behavior to nonnative speakers". In M. Celce-Murcia (Ed.) *Teaching English as a second or foreign language*. Newbury House.
- 佐野正之, 1995. 「英語教育で行う異文化理解教育の考え方」『英語教育』大修館書店.
- 笹原洋子, 1994. 「異文化に見られる“丁寧さのルール”の比較」『異文化間教育』No.8. アカデミア出版会.
- 高橋朋子, 1993. 『アメリカ英語』サイマル出版会.
- 鶴田庸子, Paul Possiter, Timothy Coulton. 1988. 『英語のソーシャルスキル』大修館書店.
- Wolfson, N. 1989. *Perspectives : Sociolinguistics and TESOL*. Newbury House.
- 吉田研作, 1995. 『外国人とわかりあう英語——異文化の壁をこえて』ちくま新書.

付録

EVALUATION

Date : _____ Name : _____

- (1) Are you interested in cultural differences in terms of the social rules of speaking between Japan and English-speaking countries?

Yes

No

- (2) Have you ever studied the social rules of speaking?

Yes

No

- (3) What did you learn as a result of today's mini session?

- (4) What was your favorite part of today's session?

- (5) Additional (including negative) comments :

- (6) What is your overall opinion of today's mini session? (Circle one)

Excellent

Good

Fair

Mediocre

Poor